

入 選

北海道のホスピタルガーデン

『グリーン・リトリート』に籠めたこと

入 選

株式会社いずみガーデン 和泉玲実様

何方にも、自分を見失う場面があると思います。

私の場合は、娘が生まれた時でした。ホルモンバランスの崩れから「産後鬱」になり、気だるく身動きも思うにまかせず、すべてに見放された気持ちになり、心塞ぐ日々が続きました。

「あの時に病室の窓から、風にそよぐ木の葉が見えたら、自分を包んでくれる自然の営みを感じたら、どれ程に安堵したのだろうか」の体験を通して、私は「置かれた境遇で、自然を感じる機会のない方々へ、心を包みこむ「庭づくり」を思い立ちました。

今まで学ばせていただいた「ヒーリングガーデン」に、より心や身体に寄り添って、五感に話し掛けるデザインを考えってみました。

この庭の緑は車椅子でも手の中に草木の感触をいっばいに感じられ、草木の匂いが語りかけるよう「より身近に、実際に触れて」を設計してみました。車椅子の方と歩行者の方が行き交う場に「お互いに謙譲の気持ちを発揮する場」を持つていただけるように、譲って貰うだけでなく、譲ることができるようにコンクリート舗装の横に砂利のスペースを設けさせていただきました。

半年におよぶ北海道の長い冬が明け。窓から春がいつばいに見えるように、クシロヤエザクラ、クロフネツツジのピンクなど配置して、いち早く春の光を浴びたい、外に出たい気持ちが生まれるようにしました。医師も、看護師さんも

緊張の時間と日々に、ほっと息のできる空間、スタッフと患者様と心通わず空間も造らせていただきました。

願いとして、草木の天に向かい伸び上がる闊達（かつたつ）な姿、色合いを競う華（はな）やぐ姿、地を這うように生きる草の根強い姿に、自分を重ね合わせる力を貰える場も造らせていただきました。

車いすの走りが良いコンクリートやアスファルトで全てを造るのではなく、自然素材を石張りも加えました。一枚一枚の色合いの違い、形の違い、若干の凹凸に人の温もり感じていただきたく工夫させていただきました。カラーアスファルトも従来の赤いアスファルトよりも茶に近い、自然な色を作り出してもらいました。病室を離れて誰かと話したいときに、通りかかる人との距離をあまり遠くない場所にベンチを設置し、気遣いたいときにお互いに気遣える距離（間）を大切にしました。そんな意味を込めてこの病院のお庭を「グリーン・リトリート」と名付けさせていただきました。名前の本来の意味は「本来の自分に戻るための時間」です。

身近に癒やされる「お庭」があることはストレスに苛まされる私たちには一番の友、大事な親友に値します。

アメリカで造園のデザイナーアシスタント、またデザイナーとして働き、施設に隣接した庭の大切さを経験させていただきました。ドラッグ中毒患者治療施設に隣接するガーデンや癌末期患者

を受け入れているホスピスに隣接された庭の作りから学び得ることがたくさんありました。

「好きな時間に、何処からでも出られるようにと庭への入り口がたくさんあること」や「その施設の日常的なプログラムに庭に出て庭を感じてもらうことが含まれている」ことが印象に深く刻まれております。人に働きかける庭の姿を見た気がします。

この度の、「グリーン・リトリート」の取り組み視点が皆様のお役に立つことを切にご祈念申し上げます。



講評



理事 富島 三貴

ご自身の入院経験を通して感じた「自然に触れることの大切さ」をヒーリングガーデンとして表現したいというコンセプトから、セラピーにつながる工夫が随所に現れています。高齢者や車椅子の方々に対する配慮、コミュニケーションがとれる椅子の配置、空間バランスへの工夫をとっても評価します。また、安らぎに重視した自然な色合い、靴を脱いで楽しめる環境づくりは特に素晴らしいと感じました。医療スタッフのストレス軽減支援に繋がり、人に働きかける庭づくりとして、癒やしや本来の自分に戻るための時間・空間調整を創作過程において重視されたことが、全体バランスとして安らぎを与えているように感じました。闘病生活は単調で自然に触れる機会も少なくなりますが、「グリーン・リトリート」と命名されていることや病を得たことも含め思慮の深さをうかがえます。患者様そして職員スタッフへの思いやりを感じさせ、「心身ともに笑顔で健康」をつくるガーデンセラピーの好例となっています。

